

植木啓子さんの頭には、その5年前、シマダタモツさん(54)に初めて依頼した、フランス人建築家、ジャン・ヌーベルの展覧会の図録があった。フィギュアスケートになぞらえて「今まで見たことのない4回転半を見せて、とお願いしました」。

そうしてできたのは、アクリルの半透明の箱入りで、アクリルの表紙にシルクスクリーンでデザインを印刷したり、白い紙に白一色で印刷したり……。校正で徹夜明けの朝、白のページに直しを入れているシマダさんを見て、植木さんは「そんなん修正しても誰も気付かない。後ろから蹴ったろかと思いました」と苦笑する。取扱説明書付きの前代未聞の図録は、限定特装版の価格も前代未聞の5万円!

「動のヌーベルと対極で、ラムスはシンプルな造形。『世界で一番美しい1回転を見せてほしい』と頼んだんです」

この口説き文句は、シマダさんの「誰もやったことないことをやつたる」魂を大いにくすぐった。植木さんも心得たものである。

当初、図録の写真はドイツから送られてくる予定だった。ところが妥協ということを知らないし知ろうとはしないシマダさんは、プレゼンテーションするにあたって、「リアルなサンプルを作りたい」と考えた。わざわざドイツからラムス氏がデザインしたレコードプレーヤーの中古を購入し=写真、展覧会のポスター写真を依頼していた写真家の奥脇孝一さん(69)に「ドイツのカメラマンにライティング(照明)とかを説明したいんで」とプレゼン用の写真も頼んだ。

今もシマダさんと組むことが多い奥脇さんは苦笑する。「シマダさんは準備に予算を使っちゃう。ドイツから取り寄せて、とかあり得ないですよ」。そんなこんなで予算を使ってしまったシマダさんは「奥脇さんに『ギャラがこんだけしかない』と言うと、さすがにびっくりされました。申し訳なくて」と笑う。笑い事ではないだろうに。

奥脇さんには、ライトをここに置いて、というライティングの配置図まで描いてもらって、ドイツのカメラマンに説明した。ところが後から送ってきた写真は、シマダさんの眼鏡にかなうものではなかった。「ラムスのすごいのは、製品の熱を逃すドット(小さな穴)部分のデザインのきれいさとか、裏側にもこだわってる」というシマダさんにとって、まるでオモチャの世界を撮ったみたいにアリティーのない写真を使う選択肢はなかった。

「展示品を早急に日本に送ってもらって、こっちで撮ろう」。シマダさんがそう言い出したのは、8月ごろだったと植木さんは記憶している。通常、展示品の輸送は展覧会の直前。それを1カ月以上前倒した。「なんで首を縦に振ったか、わからないんです」と植木さんは首をかしげる。

「緊急輸入みたいな感じで手配を急いで。倉庫の場所も取るし、周りに迷惑かけるのがわかつてて、なんで私はやってしまったんだろう。驚きは見えたけど、ムチャする気はなかったんです」

植木さんは10年前を思い返し、ハンカチで目頭を押さえた(ふりをした)。こうして修羅場が始まった。

ドイツ・ブラウン社の工業デザイナー、ディーター・ラムス氏の作品を展示する「純粹なる形象—ディーター・ラムスの時代」(2008年11月15日~09年1月25日)は、サントリーミュージアム[天保山](大阪市港区)の学芸員、植木啓子さんが企画し、シマダタモツさんが図録のアートディレクターを務めた。

ル
デ
ル
晴
レ

「世界で一番美しい1回転を」